ままならぬ心情、望郷の念に、潘安仁の『秋興賦』の詩情を投影させ、それを背景に切なく詠う。

131 世路間彌險　世路間たりて　彌險し
132 家書絶不傳　家書絶えて傳はらず
133 帶寬泣紫毀　帶寬びて紫の毀るるに泣く
134 鏡照嘆華巔　鏡照して華巔を嘆く
135 旅思排雲雁　旅の思ひは雲を排する雁
136 寒吟抱樸蟬　寒吟は樸を抱く蟬
137 一逢蘭氣敗　一たび蘭氣の敗るるに逢ひ
138 九見桂華圓　九たび桂華の圓なるを見る
139 掃室安懸磬　室を掃ひて懸磬に安んず
140 扃門嬾脱鍵　門を扃して脱鍵に嬾し

【十五段】

この十句では、秋の風物に触発されている「心象風景」を詠う。ここには、わが身を百四十一・百四十二句で「跛牂重有縶（跛牂　重ねて縶有り）瘡雀更加攣（瘡雀　更に攣を加ふ）」と詠むように今の太宰の我が身の姿を「跛牂」「瘡雀」と自虐的に形容する。そこには老齢に加え心身ともに苛酷さを増す太宰の謫居生活から来る我が身の衰えと共に、かつて要職を拝したときに、辞退したい旨の文書を作成した中で使った、我が身を卑下する文言が、今、この太宰の地で現実のものとなっていることのやりきれなさが切々と句裏より詠み手に伝わって